物理重視な魔法使い

活字中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
物理重視な魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ４９７６Ｘ

【作者名】
活字中毒

【あらすじ】
気が付いたら異世界にいた、しかも子供の姿で。
はまっていたオンラインゲームの世界と似てるけどまあ別にいいか
鉄九郎の取り敢えず始まった第二の人生
※不定期更新です

設定と言うか色々（前書き）

設定とか出てくる銃とか色々と、
見なくてもこれといって問題無いしネタバレになるかもしません。

設定と言うか色々

〈人物〉

・鉄九郎：１２歳、身長１３８ｃｍ、黒髪灰眼、冒険者ギルド登録名ジャックドー、特徴、チートその１、短身でどう見ても子供だけどかなりの馬鹿力、服装は基本的に黒ずくめ、一人称オレ。

・真宮水来：８歳、身長１２８ｃｍ、黒髪灰目、特徴、チートその２、九郎の幼馴染で九郎にはミミズクと呼ばれてる、ビーストテイマー、水系魔術を愛用している、服装は基本白と青、一人称あたし。

・ゲイル・トーカ：３０歳、身長１９５ｃｍ、焦茶髪黒眼、鍛冶師ギルドに実名で登録、特徴、ブラックスミスの鍛冶師、フェルの師匠、気さくなおっさん、一人称俺。

・フェルム・アイン：１５歳、身長１７１ｃｍ、焦茶髪赤眼、鍛冶師ギルドに実名で登録、特徴、愛称フェル、凄腕鍛冶師だが手先が不器用、一人称僕。

・チック・クロック：１２歳、身長１４５ｃｍ、赤髪藍眼、冒険者ギルド登録名ファセット、特徴、タックの双子の姉で心配性、タックより少し髪が長い、一人称私。

・タック・クロック：１２歳、身長１４８ｃｍ、赤髪藍眼、冒険者ギルド登録名ベゼル、特徴、チックの双子の弟で能天気、チックより背が少し高い、一人称ぼく。

〈街、国〉

・東の街フォレストウッド、魔術の研究が盛ん、竜人族の街

・西の街ブラックスミス、鍛冶が盛ん、出てきてないけどドワーフの街

・南の街コレクト、近くに様々なダンジョンや火山がある、建物の半分は宿屋の街

・北の街ホーストンタウン、商業が盛んだが治安が良くない、向こう岸が見えない川に架かる橋の上の街

・中央の国ブレイブルグ、ほとんどのギルドの本部がある、色々な種族の人がいる国

〈銃と弾薬〉

・ウェルロッドＭｋ．？（消音拳銃）：全長３１０ｍｍ、重量１０９０ｇ、装弾数６発、有効射程２３ｍ、弾種．３２ＡＣＰ弾

・Ｖｚ６１（短機関銃）：全長２７０ｍｍ、重量１２８０ｇ、装弾数３０発、有効射程距離２５ｍ、弾種．３２ＡＣＰ弾

・Ｌ１１５Ａ３（対人狙撃ライフル）：全長：１２３０ｍｍ、重量６．５ｋｇ、装弾数５発、

有効射程１５００ｍ、最高射程２４００ｍ、弾種．３３８ラプア・マグナム弾

・ＰＧＭヘカート？（対物狙撃ライフル）：全長１３８０ｍｍ（ストック伸長時）／１１４０ｍｍ、
重量１３．８ｋｇ、装弾数７発、有効射程１８００ｍ、弾種．５０ＢＭＧ弾

・．３２ＡＣＰ弾：主に拳銃用の低威力の弾

・．３３８ラプア・マグナム：主に狙撃ライフルの弾

・．５０ＢＭＧ弾：主に対物ライフルの弾

〈ギルド〉

・冒険者ギルド：加入すると冒険者ギルドカードを貰えクエストを受けれる、
クエストは庭の草引きからモンスター討伐まで何でもあり、
ランクが上がると名指しで依頼されたりする。

・魔術師ギルド：冒険者ギルドの傘下ギルド加入資格は魔力の保有、
加入すると職種が魔術師か魔法使いになる
魔法使いは魔術師の上位職で魔法を使えないとなれない。

・商業ギルド：商人や職人の集まり。加入すると商業ギルドカードを貰うか

冒険者ギルドカードにサブのジョブが追加される。

・鍛冶師ギルド：商業ギルドの傘下ギルド加入資格は試験に合格するか鍛冶師の弟子になる事、加入すると鍛冶師になれ、自分の印を持てる。

〈特殊能力〉

・スキル：覚えれば誰でも使える、精力を使って発動する、発動している間は常に精力を使っている。

・魔術：魔力と精力を使って発動する、スキルより便利なものや強力なものが多い。

・魔法：魔力のみで発動する、かなり何でも有り。

〈色々〉

・ギルドの登録名：基本的にあだ名のようなもの、商業ギルドには実名で登録する人が多い。

・鍛冶師の印：出来が良い物や気に入ったモノに入れる印、鍛冶師によって色と形が異なる。

・精力：体力と同じで鍛えれば多くなる。

・魔力：基本的に生まれた時から保有量が変わらない。

設定と言うか色々（後書き）

人物とかギルドとか色々と後付設定が増えていきます。

プロローグ　生前（前書き）

小説が好きすぎてつい書き初めてしまった物語です
拙文ですが生暖かい目でご覧ください

プロローグ　生前

２１世紀も折り返し地点を通過した頃フルダイブ型のオンラインゲームが発明された。がフルダイブ型のゲーム機は発売当初馬鹿みたいに高価だった、具体的にＰＳ３の１５倍くらいで当然ゲーム大好きな若者世代には手が届か無かったりフルダイブに対する忌避感など諸々でそれ以降もゲームの主流は変わらなかった、が、どこぞの物好きな金持ちが途方もない額の資金援助を行いコストダウンや数本のヒットタイトルを出し特に爆発的な人気を博したのが『ＴＨＥ　ＨＯＲＩＺＯＮ』であった。

地平線の名を冠すそのゲームは、中世風の世界観と剣と魔法がある広大な大陸を中心に海と大小様々な島で構成される。だが特筆すべきことはその広大なフィールドではなく、魔法でほぼ何でも出来てしまえることにある。

中世風の世界観にも関わらずやろうと思えばヘリコプターでも作れる、作れるのだが馬鹿みないな時間とゲーム内の通貨であるシリングが必要とされる上に、普通にその代わりになる魔術が存在するのでそんな酔狂ことをする奴なぞ度し難いレベルの馬鹿くらいだろう。

話が逸れたが、兎に角何でも出来る事が話題を呼びネットを使った広大なクチコミによって一気にユーザー数を伸ばしていった、サービス開始から約半年がたった現在ではフルダイブ型のゲーム機を持っている人の５人に３人と多くの人がプレイしている。

ゲーム好きの幼馴染真宮水来（まみやみずく）（オレしか呼んでないけど）通称ミ

ミズクに誘われたのが約半年前、サービス開始直後の高校初めての夏休み１日目、何で夏休み初日の朝６時に人の家に入ってきてんだとか、そもそもどっから入ったとか、兎に角眠いとか、言いたい事は色々有ったのだが面倒になって、ゲーム機自体は前に何だったかの懸賞で当たっていたので折角誘ってくれたのだからやってみるか、と軽い気持ちで頷いたんだったのだが年が明ける頃には、ミミズク以上にはまってしまっていた、しかも変な事に。

近距離は剣、遠距離は魔術や魔法での攻撃が一当たり前の世界で銃を作ることにはまっていた。
オリジナルやファンタシーな銃ではなく有名どころではワルサーＰ３８やＩＭＩデザートイーグルなどマイナーな物ではウェルロッドなど拳銃から機関銃まで兎に角銃をを作ることにはまってしまっていた。
しかも銃の材料をを採るためによくダンジョン最深部まで一人で行くのでかなり強いという、紛うこと無きゲーム馬鹿であった。

しかし、鉄九郎（クロガネクロウ）のそんな生活も突然の終わりを告げた、通り魔の手によって。

プロローグ　生前（後書き）

と、言うわけで鉄九郎の人生終了

プロローグ　生後

目が覚めると見たことない天井だった。

・・・いや、そんなことより自分は確か殺されたはずなのに何で生きてるんだ？

まあいいか、取り敢えず起きよう、そう思い起き上がろうとするけどあまり思った通りに体が動かない、というか怠い、やっとのことで起き上がる。

周りを確認

オレは死んで、どう言う訳か気が付いたら子供の姿で生き返ったて事か？、しかも多分異世界に。

窓の外には二つも太陽が登っているし、変にカラフルな鳥が飛んでいる

うん、間違いな異世界だ、少なくとも太陽が二つの時点で日本どころか太陽系ですら無い事は確かなんだが、今の鳥は見たことあったような・・・

まあ、いいか。

取り敢えず、第二の人生スタート！！

って、これからどうしよう？

プロローグ　生後（後書き）

どうなるんだろう？
九郎は基本的に深く考えません

第一話　新しい人生

取り敢えず、まずは状況の確認が先決だ、頭の中で現状を箇条書きにしてみよう

・体はだいたい5，6才くらいだろう

・意識は少しぼやけてるけど無問題

・異世界転生？

・どこのラノベ？

・そもそもここは何処？

・・・現状確認なのに疑問ばっか出てくるよ、

ギィィー

ビクッ！？

ベットに座って考え込んでたら、いきなり後ろからドアの開く音がした。

・・・驚いて少し跳ね上がってしまったせいで、入って来た人も少し驚いてしまっている。

「坊主もう熱は大丈夫なのか？」

熱？何のことだろう、微妙な顔で首を傾げていると

入ってきた身長2メートルくらいのオジさんが苦笑しながら話し始めた

「ここは俺の店の二階にある部屋のの一つで、お前は昨日の夜店の前で熱だして倒れていたのを見つけたんだが、どうやらその様子じゃ大丈夫そうだな。ところで坊主名前はなんて言うんだ？俺の名前はゲイル・トーカだ好きに読んでくれ。」

「オレは鉄九郎、です。」

「それじゃあクロガネ、何で倒れていたのか、何処から来たのか教えてくれるか？」

「わからない、です」

「は？」

「名前以外は、わからない、です」

本当は前世のことは覚えてるんだけど、今は関係無いし本当に何も知らないので嘘はついてない。

「ん～、となると行く宛もない訳か。なんなら、ここに住むかか？」

「・・・いいんですか？」

「多少店の手伝いをしてくれさえすれば良いぜ。」

「ありがとうございます、ゲイルさん」

「ハハッこれから宜しく頼むぜクロガネ、ところでお前腹は減ってるか？」

「少し減って、ます」

「よし、何か食べ物持って来てやる、待ってろよ」

そう言い残して、ゲイルさんは部屋を後にした。

・・・緊張した、ゲイルさん良い人なんだろうけど、かなりデカくて普通に怖いから緊張してまともに喋れなかった。

それにしても、ゲイルさん、いくら相手が子供だからって名前意外覚えてないって言ってる奴を泊めてくれるなん、いつか恩返しをしなければ。

今更だが、言葉か通じて良かった・・・

第一話　新しい人生（後書き）

ゲイルさん巨漢だけど気さくないい人です

第二話　色々と確認

ゲイルさんが持ってきたパンとチーズを食べながら、この世界について聞いてみることにした。

「ゲイルさん、色々と質問してもいいですか？」

「別にいいが、少ししたら俺は仕事に戻るぞ」

「簡単にでいいので、この街について教えてください」

「この街についてか、そうだな、まずこの街は大陸の西側にある職人の街ブラックスミスだ、
名前の通り鍛冶が大陸一盛んで冒険者がよく装備の手入れや購入にやってくる。」

「・・・この世界ってどんな形ですか？」

「俺たちのいるコンチネント大陸を中心に海と色々な島が点在している。」

「・・・・・・」

ブラックスミスは『ＴＨＥ　ＨＯＲＩＺＯＮ』でのオレのホームタウンだったし
大陸の名前まで同じってどうゆうことだ？

「どうした？」

「いえ、なんでもないです。よかったら、他の街についても教えてください。」

「そうか、じゃあ、まとめて言うぞ、東にあるのが竜人族の街フォレストウッドで大陸一魔術が盛んだ。
南には色々なダンジョンがあるから冒険者のための宿や酒場が多く集まった街コレクトがあって、
北には巨大な橋の上にあるホーストンタウンがある、貿易都市だから大陸中から人と物があつまある。
後は、大陸の中央に位置する唯一の王国ブレイブルグだな。
他にも色々な村が世界中にあるが、まあ、この五つを覚えておいたほうがいいぞ。」

「それじゃあ、そろそろ仕事にもどる、他に聞きたい事があるなら明日にしてくれ、
あとこの鞄はお前が倒れてたときに持ってた鞄だ。中身は見てないがやけに重たいぞ」

そう言うとゲイルさんは食べ物と一緒に持ってきたスリーウェイバックをベットの端に置くと部屋を出ていった、窓の外に目を向けると夕日がさしてきている、ゲイルさんの話では昨日倒れてから寝続けてたらしいからから２０時間は寝ていたみたいだ。

取り敢えず、鞄の中身を確認してみよう。

〔鞄の中身〕

・冒険者ギルドのギルドカード

・魔導書〔覚えている魔術と魔法を記入している〕
・兜割り－長さ１メートル
・．３２ＡＣＰ弾－３００発
・．３３８ラプア・マグナム弾－１００発
・Ｖｚ．６１スコーピオン－マガジン×３
・ウェルロッドＭｋ．？－マガジン×１
・Ｌ１１５Ａ３－マガジン×３
・色々なインゴット－大量
・ｅｔｃ．

このほとんどファンタジー感のない荷物は間違いなく『ＴＨＥ ＨＯＲＩＺＯＮ』での俺の荷物だ。
何でこの荷物があるのかとか気になるけど、取り敢えずもうこの世界が『ＴＨＥ ＨＯＲＩＺＯＮ』の世界であることは確定したってことにしておこう、考えても分からんし。

ギルドカードも確認しよう。

登録名：ジャックドー

年齢　：８

ランク：D

ジョブ：〔メイン〕魔術師 - 〔サブ〕鍛冶師

登録名がゲームのままだけど、まあいいか。それより今のオレは８才だったのか、
８才にしては体が小さい気がするけど、それもまあいいか。どうしようもないし。
あと、ランクって何だ？これはゲームの時にはなかった、明日ゲイルさんに聞いてみよう。

これらを入れてた鞄は見かけ上はただの黒いスリーウェイバックだけど自家製のマジックバックで
防刃、防塵、防水、防弾、防炎、自動浄化作用有り、まず、絶対に壊れない、
さらに、中身が異空間になっているので鞄口より小さい物ならいくらでも入れられる。

欠点は中身に関係なく重さが６０キロあるから背負ってると少し走っただけでも結構疲れる、
そもそも走れない、むしろ背負ってるだけで疲れることくらいだ。
ゲームのときは重さとか気にしなくても良かったけど現実になると結構キツいぞ、これ。

さて、次は魔導書を確認してみよう。

〔習得済み魔術〕

発火（イグニス）：炎魔術の基礎ものに火を付ける、戦闘にはむいてない。

発水（ハイドゲン）：水魔術の基礎水を発生させる、主な使い道は飲水。

発電（エレクトル）：雷魔術の基礎指向性のある電気を発生させる、少し痺れる程度。

発射（ディスチャージ）：物をソフトボール位の球速で真っ直ぐ飛ばす、敵の気をひける。

強化（リンフォース）：他の魔術の前に付けることでその魔術を強化する、単体では無意味。

隠遁（エクスティング）：物や人の姿を隠す、強い衝撃を受けるか攻撃で効果が消える。

浮遊（フローデト）：物や人を浮かす、飛行ではないので推進力がないと動かない。

治療（トリードボウ）：生き物の怪我又は病を治す。重度の怪我や病には効果が薄い。

何頁か読んでみたけど、これはゲームの時と変わって無いみたいだった、続きの確認は・・・

今度でいいや、めんどくさいし、取り敢えず確認終了。

外は完全に夜になったみたいだし、取り敢えず今日は寝よう、

荷物を鞄に放り込んで枕元に置く、それではおやすみなさい。

第二話　色々と確認（後書き）

攻撃方法が物理重視どころか基本的に魔法無視な九郎です。
銃については一様、設定とか色々に書きました。

第三話　予定決定

〈翌朝〉

むくり

目が覚めてから３０分くらいたってからようやく体を起こした。
まだ少し頭がボーとしてる、この世界でも朝が弱いのには変わりは無しか。
取り敢えず、着替えて一階に降りてみよう。
あ、着替え持ってないや。

まあいいか、このままで寝巻きってわけでもないし。

カバンは重くて面倒なのでそのまま部屋においといて部屋を出た。
部屋を出てみると自分の出てきた部屋以外の扉が三つあって廊下の突き当たりに階段が付いていた、
上りが無くて下りの階段だけあるって事はこの家は二階建てか。

階段を降りて一階に行ったら居間らしきところにゲイルさんと知らない少年が一人いた。
背が俺より高いので多分年上だろう、彼もここに住んでいるんだろうか？

「んん？、ああ、起きたかクロガネ、コイツもここに住み込みで働いてるんだ、仲良くしろよ。」
「僕はフェルム・アインだ今年で１１になる、フェルって呼んでくれ。」

「オレは鉄九郎、よろしく。」
「そこのドアを出たところに井戸があるから顔を洗ってこい飯にするぞ」
「分かりました。」

井戸で桶に水をくみのぞき込むと、鏡になって自分の顔が映る。髪は黒くて少し顔が整ってる、目の色が灰色になってる以外は前世とほとんど一緒だった。
バシャバシャと顔を洗い拭くものを持ってなかったので袖で拭い家の中へ戻った。

中に戻ると朝飯であろうパンとリンゴっぽい果物が用意されていた。
2人はオレが席に着くとおもむろに食べ始めた、食事の挨拶は無いみたいだ。
パンと果物だけなので3人とも直ぐに食べ終わった。
フェルは食べ終わると直ぐにどこかへいってしまった。

「クロガネ、カバンの中身は確認したか？」
「はい、昨日寝る前にしました。」
「それで、荷物から自分について何か分かったのか？」
「ちょとまっててください」

言うより見せたほうが早そうなので部屋のカバンからギルドカードを持ってきて見せると
ゲイルさんは目を丸くした。

「お前、冒険者だったのか。」
「そうみたいです、ところでギルドカードに書いてあるランクって

なんのことですか？」

「・・・本当に何も知らないのか。
ランクってのはそのまま冒険者の強さやギルドでの依頼の難易度の目安ってことだ、
DからC，B，Aの順に上がっていってその上にSランクがある。
ランクは成人してからでないと上げられない決まりになっていて、
確かSランクは今のとこ世界に3人しか居ないはずだ。」

「結構驚いてたけど子供の冒険者ってそんなに珍しいですか？」
「いや、ギルドカード自体は試験を合格すれば何才でも作れるが、
魔術師は冒険者のなかでも１００人に1人くらいの割合しかおらんのだ。」

「他に質問はあるか？」

「成人って何才ですか？」
「１２才で成人だ、フェルは来年成人する。
まあ、成人はただの節目ってだけだから成人したから何があるってわけでもない。」

「それじゃあ、あと4年ここに住まわしてください。」
「まあ、俺としてはいつまで居ても別にいいが、そのあとどうするんだ？」
「取り敢えず、ブレイブルグに行こうと思います。」
「そうか、質問はこれで終わりか？」
「はい、ところで今から街の探検にでていいですか？」
「別にいいが道には迷ってくれるなよ」
「わかりました。」

部屋に戻って取り敢えずウェルロッドをズボンのポケットにかくして持っていくことにして顔を洗うときに通ったドアから外にでる。どうやら裏口だったみたいで井戸の隣の細い道を進んでいくと広場らしき所にでた。

異世界らしく?色々な色の髪の人がいるが思ったよりも黒系の人もいた（ゲイルさんとフェルは焦茶色していた）ので少し安心した。自分だけ黒髪とか目立って嫌だ。

ゲームの時はこの街に家を買っていたので、取り敢えずその家のを目指してみる。

家と言ってもほとんど作った武器とか鍛冶道具を置いてるだけだから別に無くても問題無いしあると思って無かったんだが意外な事に家があった。入ってみると置いていたアイテムも見たところ全て揃ってるし、後でカバンをもってきてアイテムを回収しておこう。

倉庫、もとい家を後に次はギルドの場所の確認などをして街を回っり、

だいたい一回りする頃には日が暮れ初めていたのでゲイルさんの家へ帰った。

第四話　四年経過（前書き）

何だかんだで四年経過

第四話　四年経過

〈約４年後〉

突然だけどこの世界での暦の説明、１年は白，黄，赤，青，黒の五ヶ月３００日、
１月は１０日間を１巡とした６巡間６０日で構成されている。

何で月が色かというと実際に夜になるとその色の月が登るからで、白月が一番明るくて黄月→赤月→青月の順に暗くなり黒月はほとんど見えなくなる。さすが異世界、摩訶不思議だ。

月の色が変わるメカニズムについては街の図書館で調べてみたら、空気中の魔素が云々書いてあったけど当然覚えてない。

今日は黒月５巡目の５日でゲイルさんに拾われたのが黒月５巡目の８日なので、今日で１１９７日目だ。
どうでもいいな、取り敢えずそろそろブレイブルグまでの旅の準備を始めないといけない。

あと、オレの誕生日は黒月２巡目の４日なので既に成人している。本当は誕生日知らないけど、毎日ギルドカードを確認してたら黒月２巡目の４日に年齢が変わっていたのでその日を誕生日に決めた。

取り敢えず、カバンを持って部屋を出て一階へ

そうそう、ゲイルさんは鍛冶屋をやっていてフェルはその弟子らしい。
オレも筋トレの意味を含めてよく２人の手伝いをしていた、フェル

の鍛冶の腕は現在ではこの街の五本の指に入るくらいで、フェルの鍛えた装備はちょっとしたブランドものだった。

「おはよう、ゲイルさん、フェル。」
「ああ、おはようクロガネ。」
「おはよう。クロウちょうど良かった、これ直してくれ。」

ゲイルさんはのんびりとお茶を飲んでいてその隣で懐中時計を弄っていた、
フェルは鍛冶の腕は凄いが機械類が全くダメで直そうとはするが直せたことがない。
フェルから時計を受け取って壊れてる部分を見てみる、
・・・真ん中が凹んでいて全体的に歪んでいる。

「フェルどうしたらこんな壊れ方をするんだ・・・。」
「金床に落とした上に金槌で叩いた、そんなにひどいか？」
「時計屋にもって行ったら買い替えをすすめられるレベルだ。」

ため息をつきながら鍛冶スキル〈修復〉を使って歪みやヒビを直しながら組み直して完成。

「オレは後3日くらいしたら、旅立つから次からは壊れたら直ぐに時計屋で直してもらえ。」
「分かったよ、時計も直してもらったし仕事にもどるよ。」

やって無かったので時間の説明、１日２０時間で単位は前世と同じだけど分と秒の概念がないので
さっき直した時計は時間の針だけ付いていて中身の歯車とかが少ないので覚えれば誰でも治せるんだけど、初めて見たときは何か分からなかった。

「ギルドに行ってくるよ。」

いつも通り裏口から出て広場へ行く、広場の1番大きな建物が冒険者ギルドだ、
最近は旅の資金を稼ぐためにギルドのクエストを受けている
ギルドに入って直ぐにある依頼掲示板を見る。

クエストのランクが高い物の方が報酬もいいが自分のランクより2ランク以上うえのを受けるには契約金として報酬の半額を払わないと受けれないことになっている。
なんでそんな規則になってるかって言うと、高ランクのクエストをクリアして早く自分のランクを上げようと無理をして怪我や死亡する冒険者を減らすためらしい（受付嬢談）。

という訳で金の余り無いDランクのオレはD，Cランクの中から報酬がいいものを探す。

「これにするか。」

今さっき貼られた依頼状をクエストボードから取る。

〈依頼状〉
ランク：D
内容：引越しの手伝い
日付：黒月3巡目の5日（今日のみ）
人数：1～5人
報酬：銀貨5枚（山分け）

Dランクのクエストは基本的に便利屋てきな物が多くて自分のラ

ンクが上がりずらいけど、報酬自体はCランクよりDランクの方がいいことの方が多い。

受付でクエストを受けると、まだ帰って無かった依頼主に連れられて家へ向かう。
依頼主の家に着くと凄い量の小物があった。
・・・依頼主よ、普通ならこの量で銀貨5枚は安いぞ。

「これ全てを引越し先の家に運べばいいんですか？」
「はいそうです。」
「了解しました。」

カバンを開いて次々と中に入れていき、入るものは全て入れて入らないモノは〈浮遊（フローデト）〉で浮かせてカバンからだした紐でまとめて担いで終了。目が点になっている依頼主に話しかける。

「引越し先の家まで案内してください。」
「・・・分かりました、それにしてもすごいですね。」
「そうでも無いですよ、ほとんどカバンの能力だし、〈浮遊（フローデト）〉は浮かすだけなので〈飛行（フライト）〉とは比べ物にならないくらい簡単な魔術ですから、それより行きましょう。」

1時間くらい歩いたところにある引越し先の家について荷物を置いたらクエスト終了
報酬の銀貨5枚をカバンから取り出した銀貨を入れてる袋に入れる。

この世界の硬貨は銅貨，銀貨，金貨，白金貨，ミスリル銀貨、アダマント金貨の順に価値が高い、
銅貨１００枚で銀貨1枚ってな感じで１００枚ことに上がる。
ついでに、アダマント金貨は銅貨１００億枚分なので、まず手にす

ることがない。

さて、今回ので旅の資金が合計銅貨６８枚と銀貨４５枚集まったので、旅に要りそうなものを買いに行こう。市場をふらつきながらテキトーに要りそうなものを買っていく。

防具屋で見つけた烏羽色のフード付きコートを買った。銀貨２５枚と結構な高値だが対刃と自動浄化の効果付与がされていて値段以上の高性能なものだったので野宿や戦闘など色々役に立ちそうだ。次に雑食屋で果物や保存食のクッキーやパンを買ってカバンに入れて家に帰る。

鞄の中のものは変化しないので果物は腐らないしパンは硬くならない、

・・・もう慣れたが、本当に重くなければ最高のカバンである。

第四話　四年経過（後書き）

説明だらけでごめんなさい、次で九郎は旅に出ます。

第五話　旅立ち（前書き）

初の戦闘と新キャラ登場です

第五話　旅立ち

〈三日後〉

さて、今日でこの部屋で起きるのも最後と思うと感慨深いというか何というか、まあブレイブルグからここまで馬車で5日くらいなので帰ろうと思えば帰れるのでそんなの寂しくは無いかな。

「さて、準備だ。」

って言ってもコートと武器とカバンを装備するだけで他の荷物はカバンに全部入っている。

で、今の格好が焦茶色の靴に黒銀色のズボンと灰色の半袖シャツの上にこの前買った烏羽色の薄手のコートに黒いカバンをたすきがけしている。

・・・真っ黒だが前世の時からいっつも真っ黒だったのでこれが俺のセンスなんだ仕方ない。

武器は、ウェルロッドをコートの内側に付け足したポケットの一つに入れて、兜割りは自分の身長が１３８ｃｍ（ＧＭＰヘカート？と比べたら同じだった）なので１ｍのモノを腰に指すと地面についてしまうからカバンの肩紐とクロスするように背に背負う。

ウェルロッド、正確に言うとウェルロッドｍｋ？は黒色の暗殺銃で．３２ＡＣＰ弾を使用、発砲音がほとんどしないが弾の威力はそんなに強くなくて装弾数は６発、グリップに赤い烏の印を入れてる。

兜割りは鞘と柄が藍色で刀身は緋色、と言うかヒヒイロカネ製で銘は『赤烏』はばきに赤い烏の印を入れていて、スキル〈破壊〉が使える。

〈破壊〉の発動条件は強く叩き付けるだけで、発動するとだいたい何でも破壊する。
ツルハシに付与すれば採掘が楽になる。

もう一つ言うとオレは別にチビではない、ただ成長が遅いだけだ、１０才くらいとよく間違われるけどオレはチビではない、大事なことなので2回（以下略。

閑話休題

取り敢えず、それだけ装備して他の武器（主に銃）はカバンに入れたままにしておく、今更だがこの世界にはそもそも銃が無いので人に見せないようにしないと色々拙い気がする。

装備もすんだのでゲイルさんとフェルに挨拶してから出ていこう、1階に降りたら2人がいるのでそもそもコッソリ旅立つとか窓からでないと不可能だ。

「おはよう、ゲイルさん、フェル。」
「おはようクロガネ、今日でお前は旅立ちか。」
「はい、お世話になりました。」
「おはようクロウ、少し待っててくれ今餞別(せんべつ)もってくるから。」

言うやいなや、フェルは工房から何かを持ってきた。

「ほら、これ餞別の刀だ、結構力作だぜ。」
「ありがとうフェル、大事に使うよ。」

取り敢えず、刀を鑑定、長さはだいたい７０ｃｍで直刀、鍔は無く鞘と柄は焦茶色で黒鋼製で刃が少し黒っぽい、柄頭に銀白色のト

カゲの印が入っている。スキルは〈不変〉が付与されている。
〈不変〉の発動条件は柄を握っていることで、発動中曲がったり刃こぼれしなくなる。
武器や防具に入っている印は職人が鍛冶ギルドで自分のオリジナルの印を登録してから入れることができる。だいたいは師匠の印の色を変えて引き継ぐことになっている。（ゲイルさんのは朱色のトカゲだ）

「それじゃあ二人とも行ってきます。」
「ああ、達者でな。」
「元気でいろよ。」

刀を『赤烏』と二本一緒に背負い、じゅうわるいので『赤烏』をカバンにしまい門に向かう。

街の門は東側にあって、そこから出たらずっと東に進んだらブレイブルグに着く、はずだ。
取り敢えず、出発だ！

「おい、ちょっと君。」

・・・景気良く門を通ろうとしたら門番に呼び止められた。

「なんでしょう？」
「最近は魔物が少し凶暴になっているから子供1人で出歩くのは危ない、
街から出るなら親御さんと一緒じゃないと出せれないよ。」

やっぱり子供と間違えられた、少しイラっときたが顔には出さない。

成人してるって口で言っても信じないのでギルドカードを見せて年齢の確認をさせる。

「本当に成人してる、悪かったな疑ったりして、
でも最近魔物が凶暴化しているのはホントだから気を付けて下さい。
」
「分かりました」
「では、良い旅を」

はぁ、もしかして次の街でも子供に間違えられるかもしれないと思うと、
憂鬱だが、ギルドカードのおかげで無事旅に出れたし、まあいいか。

ブレイブルグまでの道は整備はされてないが道があったので、まず迷わないだろう。
歩いていると日が頂上に達したので道の端にあった高さ3mくらいの大きな岩の上にスキル〈脚力強化〉を使って飛び乗ってその上で飯にした。〈脚力強化〉は名前の通り走る速度や跳躍距離を一定時間強化する便利なスキルだが多用すると筋肉痛で動けなくなるので控えめに使っている。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

・・・石の上が思いのほか気持ちよく気が付いたら寝ていたらしい、
ほとんど日が沈んでる。
取り敢えず、進むか。

　結局歩きだして直ぐに日が沈んだが元々夜目がきくのと月明かりが無くても星が結構出てるので不自由無く進めるので問題ないし星

が綺麗だから特をした気分になった。んだけど、どうも魔物がいるみたいで進行方向が騒がしい。

〈隠遁（エクスティング）〉を使って姿を消して近寄ってみると二人組の冒険者が６匹のアーミーウルフに囲まれていた。アーミーウルフは夜行性で１匹ではそんなに強く無いが基本群れで行動していて囲まれると厄介な魔物だ。

このまま二人組が傷つくのを分かっていて見捨てるのは目覚めが悪いし助けるか。

〈隠遁（エクスティング）〉を発動したままカバンを下ろして刀をを抜く、一番近くにいるアーミーウルフの首を切り絶命させる、いきなりの出来事に他のアーミーウルフが一瞬固まったスキを突いて二人組も反撃に出る。攻撃したことによって〈隠遁（エクスティング）〉が解けたのでアーミーウルフがオレに気づき飛びかかって来たので、そのまま刀で突き刺し飛びかかろうとしていた奴に叩き付け、怯んだスキに首を切る、次に近くにいた奴の胴を力任せに叩き切りその向こうのもう一匹の頭も断つ。最後の一匹の首を飛ばして戦闘終了、返り血でコートが血まみれで洗いたい。

フードを脱いで二人組に話しかける。

「さて、御二人さん大丈夫か？」

「はい、助けてくれて、」

「ありがとう。」

「私は姉のチック・クロックで、」

「弟のタック・クロックです。」

「オレは鉄九郎、九郎が名前な。

オレは昼前からブレイブルグに向かってんだが二人はどこに向かってるんだ？」

「私たちも昼過ぎからブレイブルグに向かってるんですけど、」

「クロウさんどこかで抜いたっけ？」
「いやー、オレ途中にあった岩の上で飯食ってから一時寝てたから抜いても気付かなかったんだろう。
取り敢えず戦闘の後始末しないと獣や魔物寄ってくるぞ。」

取り敢えず、魔物の死骸は剥ぎ取りをせずに〈発火（イグニス）〉で火を付けて火葬して、血みどろなコートは〈発水（ハイドゲン）〉で血を洗い流すと自動浄化のおかげもあって直ぐに元通りなったので直ぐに着直す。あとはカバンと刀を背負い直して魔物の死骸が燃え尽きたので灰や骨を〈発水（ハイドゲン）〉で洗い流して終了。よし、これで元通り。

「クロウさん、魔術師なんですか、」
「あんなに近距離戦闘強いのに。」
「戦闘用の魔法なんかほとんど覚えてないが一応魔術師だ。
近距離戦闘が強いのは武器の性能が良いだけだから、二人のジョブは？」
「私たちは冒険家だよ、」
「冒険者の中で一番多い冒険家だよ。」

「あー、二人に提案なんだけどブレイブルグまで一緒に行かないかな？」
「願ってもないです、」
「これからよろしく、クロウさん。」
「こちらこそ、よろしくクロック姉弟、一人旅は途中で飽きそうで心配だったんだ。
ところで、もう大分夜が深いけど、次の村目指すのとこの辺で野宿どっちがいい？」

第五話　旅立ち（後書き）

刀の能力チートです
そして、旅の仲間チックとタックのクロック姉弟登場です。

第六話　三人旅

〈翌朝〉

昨夜はその場で野宿をしたので現在はその片付け中、とは言ってもオレは枕にいていたカバンと横に置いていた刀を背負い、クロック姉弟が毛布を自分たちのカバンにしまうのを待っている。

「片付け終わりました、」
「さあ行こう。」
「じゃあ、出発。とは言っても昼までには次の村に付くだろうけどな。」

歩きだしてから暫くは無言だったんだけど、昨日初めて会った相手と無言で旅はオレには正直キツい
何か話さないと、息がつまりそうだ。

「オレは１２なんだが二人は何歳なんだ？」
「私たちも１２歳です。クロウさん同い年だったんですか、」
「チビだから年下かと思った。」
「チビ言うなタック、あとチックも呼び捨てでいんだけど、まぁ好きに呼んでくれ。」
「分かりました、クロウさん。」
「分かったよ、クロウ。」

「ところで、二人は何でブレイブルグに行くんだ？」
「私たちはブレイブルグに帰るところなんです、」
「ぼくたちはブレイブルグに住んでるんだ、クロウは何で？」

「オレは１２になったら取り敢えず旅に出るって決めてたからブレイブルグに行くのは何となくだな。
オレは初めて行くんだが、ブレイブルグがどんなところか教えてくれないか？」

「分かりました、ブレイブルグは大陸唯一の王国で色々なギルドの本部があります。」
「姉ちゃん、流石にそれは知ってるだろ。城の地下には勇者を召喚するための召喚陣があるらしいよ。」
「それは噂じゃない、ブレイブルグでは４年に１度黄月の１巡目１０日間でランクＳ昇級試験があります。」
「昇級試験は凄いよ、毎回冒険者や商人とか色々な人が集まってお祭り騒ぎになるんだ。」
「試験参加者は公開されていて公式、非公式の色々な賭けが行われます。」
「一番大きなかけが公式の誰がランクＳになれるかって賭けだけど、」
「だれもランクＳになれない事も有るから賭ける人はみんな賭けて騒ぐのが目的になってます。」

「その昇級試験の参加条件って何がある？」
「参加条件は２つだけです、１つは冒険者ギルドに登録している事で、」
「もう一つは参加料の銀貨１０枚払うことだよ。」
「ランクは関係ないのか？」
「はい、ギルドに登録してさいいればランクＤでも参加できます。」
「でも、基本的にランクＡの人しか参加しないよ、参加するより見てたほうが楽しいから。」
「ランクは関係ない、か。」
「どうしました？」

「いや、何でもないよ。」
「そうですか。」
試験面白そうだし受けてみるかな、あーでも目立ちたくは無いんだよなー
「あと、ランクSになった人には国王からお祝いに白金貨1枚とランクSの印のバッジが貰えます。」
よし、絶対手に入れよう、白金貨1枚。金はあって損は無い。
「あ、村が見えてきたよ。」
「本当だ、じゃあ今日はこの村に泊まって、出発は明日の朝にしよう。」
「分かりました。」
「わかったよ。」
と、いう訳で村に到着。村と街の違いはギルドの数で街には最低3つのギルドがあって、村には基本的に冒険者ギルドだけある、たまに1つも無い村もあるけど。
「まずは、今日泊まる宿屋探さなとな。」
「それなら大丈夫ですよ、」
「ぼくたちが行きに使った宿に泊まればいいから。」
「じゃあ、そうしよう。」
一泊銅貨50枚の宿で部屋を2部屋とった。
チックとタックが同じ部屋なのはブラックスミスでの買い物であまり金が残ってないかららしい。
現在はその宿屋の1階のある酒屋で昼飯を食べたて今日の予定を決

めている。

「オレはこの村を見て回ろうと思うけど、二人はどうする？」
「私たちは、ギルドで依頼を受けようと思ってます、」
「旅の途中で金が尽きるとか嫌だからねえ。」
「そうか、じゃあ明日の朝まで自由行動ってことで一先ず解散。」

一度部屋に戻って刀とカバンを置いてコートのポケットに財布の袋を入れて村に出る。
取り敢えずコートとか置いてそうな服屋に行って入ってみると、村の特産品なのか赤色の染物が多い。
店主が少し怪しい奴を見る目で見てきているが仕方ない、
フードを目深に被っている黒ずくめの奴が怪しく無い訳がない。まぁやめる気無いけど。

「店主、コレはいくらですか？」
「それは銀貨１０枚だよ。」

「もうちょっと安くなりませんか。」
「無理。」

「そこを何とか。」
「無理。」

「お願いしますよ。」
「・・・じゃあ銀貨９枚でいいよ。」

ずっと（１時間位）粘っていたら店主のお姉さんが折れた。
買ったものは赤いコートで形はフードも付いていて今着てるのとほとんど同じ、

撥水加工されていて汚れが落ちやすくなってる。
他にも色々買ったので残金銀貨１０枚と銅貨３８枚、オレもギルド行って稼ぐか。

一度宿屋に戻って買った赤いコートをカバンに入れて刀とカバンを背負って出ていく、
広場に行くとギルドの前に人集りが出来ていた。
そこから少し離れた所にクロック姉弟を見つけた。

「この人だかりはどうしたんだ？」
「あ、クロウさん、最近この近くに凶暴なアーミーウルフの群れが出るらしくて、」
「それを早く退治してくれって、村の人たちが苦情を言ってるんだ。」
「へー、依頼のランクと報酬は？」
「ランクBで金貨４枚です、報酬は村の人たちが出し合ったらしいです。」
「結構いい報酬だけどアーミーウルフの群れは強いから誰も受けないんだよ。」
「ところで、二人のランクって何？」
「二人ともランクCですけど、」
「もしかして、受ける気？」
「その通り、オレはランクDだから変わりに受けてきてよ。」
「危険ですよ！ギルドが街に手紙を出すみたいですし私たちがやらなくても、」
「受けてきたよ。」
「ナイス、タック。」
「ちょっとタック！」
「大丈夫だよ、クロウ強いし。
あ、でもクロウ、ぼくたちは危なくなったら直ぐに逃げるからね。」

「分かったよ、それじゃあアーミーウルフ退治へ出発。」

「あ、ちょっと待ってよ。」

「姉ちゃん諦めなよ、受けちゃったものは仕方がないよ。」

「タックがそれを言うかな、はぁ。」

チックは諦めたみたいだ、この双子は顔はそっくりなのに姉が心配性で弟が能天気、性格は正反対だ。

まあ、こんな能天気な弟がいたら姉は心配性にもなるか。

取り敢えず、歩きながら依頼状の確認

〈依頼状〉

ランク：B

内容：アーミーウルフの群れの討伐

日付：黒月3巡目の8日～

場所：村近くの森

報酬：金貨4枚（山分け）

２０日も前から依頼してるのに解決されなきゃそりゃあ、村の人達だって苦情を出すわな。

さて、ザクっと終わらせるか。

村から往復3時間くらいの場所にある森に着くと直ぐにアーミーウルフの群れが出てきた。

数は大体３０匹、昨日の5倍はいる。刀を抜いてカバンを地面に下ろす。

「さて、二人とも怪我するなよ。〈脚力強化〉発動。」

取り敢えず、群れの一番奥目指して突っ込む、邪魔をしてくるア

ーミーウルフは首を飛ばしたり胴を断ったりして全て一撃で逝き群れの奥にいた一回り大きな角の生えたオオカミの前に立つ。
　カーネルウルフ、大きなアーミーウルフの群れのリーダーで強さはランクＢの冒険者並みだ。
毛皮は丈夫で爪や角は武器の材料になるから売れば銀貨３００枚位はいくのでなるべく傷付けずに殺したい、クロック姉弟は大分後ろの方に居るし銃を使ってもバレないだろう。

　刀を地面に刺しコートの内ポケットからウェルロッドを出す。
警戒しているのか動こうとしないカーネルウルフに全力で踏み出し一瞬で接近し、銃口を目に押しつけそのまま引き金を引くほとんど音を立てずに発射された銃弾は、目玉を潰し頭蓋骨に阻まれることなく眼窩を通り脳を破壊しする。カーネルウルフの骨はかなり硬いので弾は飛び出てこず頭の中に残った。
弾を解体する時に回収しないといけない。

　リーダーがやられて動揺してる、アーミーウルフ達を塵にして半時（３０分）程で依頼終了。
見事なまでに死屍累々、しかもオレが殺したアーミーウルフは半分だったり頭なかったりしてモザイク必須だ、後始末は烏の腹を肥やすとしてカーネルウルフの解体をしないといけない。

「取り敢えず、オレはコレの解体をしてから帰るから二人とも先帰ってていいよ。」
「どうしてですか？」
「こいつ持って帰れば狩った証拠になるし、毛皮とか角は売れるからな。」
「分かりました、行こうタック。」
「クロウじゃあまたあとでなー。」

第六話　三人旅（後書き）

九郎は普段から６０キロのカバンを持ち運んでいる馬鹿力で攻撃するので
基本一撃必殺になります。

解体を描写するのはどうかと思うので書きません。

誤字修正しました、黄金拍車さん御指摘ありがとう御座いました。

第七話

二人が見えなくなったあたりでカーネルウルフの解体と刀の手入れをする、刀はちゃんと手入れをしないと直ぐに切れなくなるので結構めんどくさい。そもそもオレは力任せに武器を振るうからこの刀に〈不変〉が付いて無かったらとっくに折れてる、そういえばフェルはオレの兜割りを刀と勘違いしてこの餞別にしたのかもしれないな、オレが持ってるの以外ブラックスミスで見たことないし・・・

閑話休題

取り敢えず無駄なこと考えながらしてたから解体と（ここでしなくても良かった気がする）刀の手入れに一時間位掛かったので普通に帰るとクロック姉弟には追いつけない、魔導書に何かいいの書いてなかったか探してみよう。

オレの魔導書は実際はただのメモ帳みたいなものでゲームの時に修得した魔術や魔法を無差別に書いていったので、何処に何が書いてあるか覚えてないしそもそも普段使う何個かの魔術以外何が書いてあるか全く覚えてない。ついでに言うと３００頁あってその内２００頁は埋まってるけど、ただのメモとかスキルも混ざってる。

適当に頁を捲ってると使えそうなのがあった。

変態魔法〈メルモフェセス〉言っておくが変態的な魔法じゃなくて変身魔法だ。

この魔法は生き物なら何にでもなれるし目や髪の色だけでも変えれるが、動物の体になっても慣れないと全く動けないし声の出し方も分からないし、人型でも体格が変わると動きずらくてすぐ転ける。

聞くだけだと全く使えそうに無いけど変装が簡単に出来るし、見つけるまで忘れてたけどゲームの時にたまに烏になって飛んでいた

のでこれで飛んで帰るとしよう。

集中し変身する姿を思い描く

「〈メルモフェセス〉発動」

一瞬で目線が凄く低くなって視界が広がる。装備はオレと纏めて一つの物って考えで変身したので解除しても裸になったりせずさっきにの装備のままの姿に戻れる。質量云々は魔法だから何でもありだ。

羽根を動かして具合を確認、問題無く動くので飛び立つ。

歩いて1時間以上の距離でも烏になって飛べば数分なので直ぐに二人に追いつけた、が今度は盗賊に襲われてる、人数は5人。

「二人ともよく襲われるな。」

盗賊の後ろに低空飛行で近づいて魔法を解除しクロック姉弟に話しかけると盗賊とクロック姉弟が面白いくらい驚いてくれたので笑いそうになってしまった。

「二人とも手助けいるか？」

「いいえ大丈夫です。」

「これぐらい何ともないよー。」

「じゃあ手は出さないよ。」

「お前ら、人を無視すんじゃねえ！」

無視して話してたらキレて切りかかってきた。

まぁ当然か、いきなり出てきた変な奴に無視された上思いっきりなめられてる。

取り敢えず盗賊の短剣を蹴り抜く、手は出してない。

ガキッ

あ、折れた。ただの（チタンを仕込んだ）靴で蹴っただけなのに、

「随分と安い武器を使ってるな。」

「高い武器買えるなら盗賊(こんな事)やってねーんだよ！」

「そういやそうだな、それでどうする？」

「は？」

「お前の仲間もうやられてるよ？」

オレが盗賊Ａで遊んでる間に盗賊Ｂ～Ｅはクロック姉弟に倒されてた。

あ、クロック姉弟の戦闘見逃した。

「二人とも殺した？」

「気絶させたでけです、」

「こんなことで殺すことないしね。」

「それじゃあ帰ろう。」

「「「え？」」」

クロック姉弟と盗賊Ａが声を合わせて驚いた。

「それじゃ、武器悪かったね。」

「ちょっと待って下さいクロウさん。」

「ん、どうかした？」

村に向かって歩きだしたらクロック姉弟が追いかけてきた。

「何で盗賊たちを放置するんだ？」

「いや、放っておいても害無さそうだったし、４人とも弱かっただ

ろ？」
「確かに弱かったですけど。」
「それって関係あるの？」
「弱くて集団戦の下手な盗賊は大体初犯だ、こんだけ惨めに負ければやめるだろ。」
「そうなんですか！」
「色々言ったけど、実は何となくなんだけどね。」
「そうなんですか・・・」
「そんなことより、村が見えてきたよ。」

二人にカーネルウルフの角を証拠に持たせてギルドに報告に行かせて先に宿に帰る。
部屋で赤いコートに内ポケットを付けて足していたらタックが来た。

「これクロウの分だって。」
「金貨3枚も、いいのか？」
「ほとんど一人で狩っといて何言ってんだよ、こっちは金貨1枚あったら十分だよ。」
「そうか、じゃあオレはそろそろ寝るよ、また明日な。」
「また明日、おやすみクロウ。」

第七話（後書き）

誤字修正しました、黄金拍車さん御指摘ありがとう御座いました。

第八話

翌朝村を発ってから1巡が経過した黒月6巡の10日の夜、現在は道の端で野宿しようとしていた、明日にはブレイブルグに着くだろう。
今日も何も起きずに順調に進めたな。
と、思ってた、ついさっきまで。

「なんだこれ。」
「空が光って人が降ってきましたね。」
「あ、うん、そうだね。」

独り言だったのにチックが答えてくれた、でも見れば分かるよ。

「クロウ、これどうするの？」
「どうするって言われてもな、取り敢えず連れてくか？」
「それより、この人まったく動かないんですけど大丈夫でしょうか。」
「確かに安否の確認が先だな。」

取り敢えずうつぶせに倒れてるのをひっくり返し脈を取り呼吸の確認、問題なし。
・・・なんだが、凄い見覚えのある顔をしてる。

ベシッ

取り敢えず頭を叩いて起こす。

「クロウさん何やってるんですか！？」
「おい、起きろ。」
チックを無視して何度か叩く。
「ん、ん～。」
「起きたか、何でお前がいるんだよ。」
「ん？、君は誰？、なんか頭痛いんだけど何でか知らない？」
「いいから質問に答えろよミミズク。」
「ミミズクってその呼び方、もしかして九郎？」
「確かに九郎だけど、質問に、」
「よかった！、四日間もどこ行ってたのよ！心配してたんだから！」
「いや、質問にって、四日ってどういう事？」
「どういう事も何も、九郎が四日前から行方不明になってたんじゃない！
それより早く帰るよ九郎、って九郎ここどこ？」
「『ＴＨＥ　ＨＯＲＩＺＯＮ』に似た異世界で、オレは何故か四年前からこの世界に居るんだが向こうじゃ四日しかたって無いのか？」
「え、異世界に四年前って何言ってんの？」
「あの、」
「クロウの知り合い？」
「あ、ごめん二人の事忘れてた。ミミズクこの二人はクロック姉弟、姉がチックで弟がタック、いっとき一緒に旅してるんだ。」
「チックです、よろしくお願いします。」
「タックだよ、よろしく。」
「えと、あたしは真宮水来です、よろしく。」

クロック姉弟と自己紹介をして落ち着いたみたいだ。やっと初めの質問に戻れる。

「ミミズクどうやってここに来んだ？」
「こけてなんか光ってる穴に落ちて気が付いたらここに居た。」
「このドジが、なんだその王道異世界召喚物語のプロローグみたいなオチは。」
「あはははは、そうだね～。」
「頭痛くなってきた。」
「ところで九郎さ、背高くなってない？」

わざとらしくこめかみをおさえてみたけど無視された。

「俺の背が高くなったんじゃなくてお前が若返ってるんだよ。というかオレも若返ってる。」
「あ～だから着てる服のサイズがでかくなってるのか。」
「多分８歳くらいだな、オレもそうだったし。」

「あのクロウさん、」
「なんか凄くデカい魔物がいる。」
「ホントだ、九郎あれなんだっけ？」
「ランジートタイガー、密林系のダンジョンのボスだな、なんでこんなところに居るんだ。」

少し離れたところにこちらを見ている全長４ｍくらいの銀色の虎がいた。

「ダンジョンボス、って逃げましょう！絶対勝てません！」
「え、なんで？」

「ダンジョンボスはランクBの冒険者６人がかりでぎりぎり勝てるかどうかって強さからです。」
「いや、大丈夫だよ。ゲーム(むかし)の時狩ったことあるし。」

「ねえ九郎ってもしかして『THE　HORIZON』のキャラの能力引き継いでるの？」
「ああ、多分ミミズクも引き継いでるよ。」
「ホント！、じゃああの子あたしに任せて！」
「じゃあ任せた。」
「任された！」

ミミズクがランジートタイガーに突っ込んで行くと後ろでなんかチックがオロオロしてた。

「チックどうかしたか？」
「クロウさんどうしてあんな小さい子に任せちゃうんですか、危ないですよ！」
「大丈夫だってミミズクは接近戦ではオレより強いから。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

〈水来視点〉

まずは飛び掛ってきたランジートタイガーを蹴り飛ばして、
「彼の者の動きを止めよ、〈氷固(アイスロック)〉」
氷で足を固める、ランジートタイガーは足の氷を壊そうと暴れてたけど少しすると諦めて大人しくなってくれたので首のあたりを撫でてから

「〈ディスペル〉」
解除魔法で氷を溶かす、火で溶かせる中級魔術を最上級解除魔法で解除するのは結構魔力の無駄な気がするけど炎系統は何にも覚えてないからしょうがない。

いきなり拘束をとかれてランジートタイガーが困惑気味に首をかしげてる。結構可愛い。
「あたしの仲間にならない？」
「ガウ。」
ランジートタイガーは一声上げるとあたしの前でしゃがみこむ、オーケーってコトかな。

指を噛んで血を出しランジートタイガーのおデコに「水」の印を書いて契約魔法を発動、
「〈サーベント〉」
この契約魔法は相手の同意とおデコにに自分のオリジナルの印を書かないと発動できなくて結構面倒だけど、契約した魔物や動物に特殊能力〈擬人〉と〈縮小〉が付くから街の中に連れて行っても大丈夫なでお気に入りだ。
あとは名前を付ければ契約終了、名前、何にしようかなー。

「よろしく、これから君の名前はランジーだよ。」
「ガウ。」
「よし、じゃあ戻ろう！」
「ガウ！」
と、言う訳でランジートタイガーあらためランジーの背中にのって九郎のもとへ戻る。

〈水来視点終了〉

ーーー

予想通りミミズクはランジートタイガーを仲間にして戻ってきた。

「ミミズクお疲れ、そいつの名前何にしたんだ？」
「ランジーだよ、九郎、この指治して、結構深く噛んじゃって血が止まらない。」
「分かった、今探すから待ってろ。」

カバンから魔導書を取り出して回復系を探す。

「あった、手出して〈治療（トリードボウ）〉。」
「ありがと、ところで九郎。」
「何だ？」
「何であそこの二人は固まってるの？」
「お前が当たり前の様にランジートタイガーに乗って戻って来たからだ、言っただろここは異世界でゲームじゃ無いんだ、そもそもゲームの時でも驚かれてただろうが。」
「あー、そーいえばそーだね。」

「二人とも、襲ってこないから別に怖がることないよ。」
「そーだよ、可愛いよ。」
「そう言われても、」
「そんな巨大な虎がいたら襲って来なくても怖いよ。」
「大きいのがダメなら、ランジー〈縮小〉。」
「ガウ。」

ランジーは一声あげると一瞬で４ｍの虎から２０ｃｍの猫になった、
・・・いや、いきなり小さくなりすぎだろ。
ミミズクは小さくなったランジーを抱えて二人に見せる。

「この大きさなら大丈夫？」
「それなら大丈夫です、」
「虎というより猫だし。」
「じゃあさ、撫でてみてモフモフしてて気持ちいいよ？」
「本当だ、柔らかい。」
「でしょ！可愛いよね！」
「う、うん。」

ミミズクは身を乗り出し笑顔でタックに話しかけ、
タックは間近で見るミミズクの笑顔に赤面してたじたじになってる。
ミミズクは幼馴染の贔屓目抜きにしてもかなりの美少女だ、ファンタシーなものが好き過ぎる少し残念な所があるけど性格も明るく元の世界でも男女共に好かれてたし、断ってたみたいでけど結構告白もされてた。

「あの、クロウさん。」
「ん？チックどうかした？」
「そろそろ、野宿の準備しないと、お腹も空きましたし。」
「そうだな、チック教えてくれてありがとう。」
「い、いえ。」
「おい、タックとミミズク飯にするぞ。」
「おー、りょーかい九郎。そういえばあたしもお腹減ったよ。」
「わ、分かったよクロウ、助かった。」

オレが考え事してる間もタックはミミズクに話しかけれてたみた

いだ。
クロック姉弟はそれぞれのカバンから干肉やパンを取り出しオレは梨の味がする林檎みたいな果物とパン二つずつ取り出してそれぞれ一つをミミズクに渡して食べる。

「チックとタックはいつから九郎と一緒にいるの？」
「私たちは12日前から一緒にいます、」
「ぼくたちと目的地が同じだから一緒に旅してるんだ。」
「へー、目的地ってどこなの？」
「ブレイブルグだ、明日には着く。」
「それは楽しみだなー。」

「ミミズク、人目の無いところ以外ではランジーを元の大きさに戻すなよ。」
「えー何で？」
「目立つし言い訳が面倒だからだ。」
「りょーかい、ランジー勝手に元の大きさになったらダメだよ。」
「がう。」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――

「さて、そろそろ寝よう、ミミズクはこれを使って。」
カバンから毛布を取り出してミミズクに渡す。
「ありがと、でもいいの九郎のがなくなるよ？」
「オレは普段から使って無いから大丈夫だよ。」
「じゃあ、ありがたく使わせてもらうね。」

「ああ、おやすみ。」
「うん、九郎おやすみ、チックとタックもおやすみ。」
「はい、おやすみなさい。」
「おやすみ。」

第八話（後書き）

という訳でプロローグで少し出てきた幼馴染登場です。

次回ブレイブルグに到着です。

矛盾点誤字修正しました。

第九話　王都到着（前書き）

５０００ユニーク突破しました、ありがとう御座います。

第九話　王都到着

翌朝、オレとクロック姉弟は日が昇り始めた頃に目を覚ました、この世界では当然電気が無いので基本的に太陽が生活の基準になっていて祭りの時や一部の酒屋を除いて日が昇ったら起きるし日が暮れたら寝る、オレも４年前からこのサイクルで生活しているが、夜遅くまで起きておくのが普通な現代人には慣れるまでは少しきつかった。
つまりオレが何を言いたいのかというかと、

「クロウさん、マミヤさんが起きてません。」

と、言うことだ。

「ああ、大丈夫オレが起こすよ。」

それにミミズクは昔から寝起きが悪い、起こしに行くオレまで何回も学校に遅刻しかけてた。
そういえば一回制服に着替えたまま二度寝したことがあったから面倒になっておぶって学校まで連れて行ったら途中で起きて顔を真っ赤にして凄い怒られて結局遅刻したことがあったな。

「おい、起きろミミズク。」
「ん～、あと５時間・・・」

ゴツッ

「痛い・・・」
「長い、さっさと起きろ。」

「ん～」
「起きろ。」

ゴツッ

「・・・九郎、あまり人の頭を殴るものじゃないよ？」
「おはようミミズク、大丈夫お前以外殴ったことはないから。」
「えー。」
「ほら、毛布返せ出発するぞ。」
「りょーかい、って朝ご飯は？」
「歩きながら食え。チック、タック出発しよう。」
「はい、」
「分かったよ。」

ミミズクに果物を二つ渡して歩き出す。
改めてミミズクの格好を見てるみと服もズボンも裾を折っていてサイズが合ってなくて少し見窄らしい、ブレイブルグに着いたら服を買いに行くか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーー

「到着です、」
「ここがブレイブルグだよ。」
「流石、デカいな。」

今いるのはブレイブルグの南門前、ブレイブルグは流石に国を名乗るだけあってとてもデカい、魔物よけの３ｍくらいの壁に囲まれていてその壁の端が全く見えないくらい巨大だ。実際はこの王都と

近くにあるいくつかの村を含めてブレイブルグなのでとっくに領地には入ってたりするけど。

「入る時に持ち物検査とかされないのか？」
「はい、基本的に馬車の中身は確認されますけど、」
「徒歩の人は怪しくなければ素通りできるよ。」
「じゃあ九郎は素通りできないねー」
「お前もな、むしろお前の方が怪しいよ。」

何よりランジーの正体がバレたら言い訳が面倒そうだ。

「まあ、目的地には着いた訳だし二人とはここで解散しよう、オレたちも多分ここに住むから縁があったらまた会おうな。」
「分かりました、また会いましょう、」
「二人ともじゃあねー。」

二人が門をくぐるのを見送ってひとまず門から離れる。

「どうするの？〈隠遁（エクスティング）〉を使って門を通る？」
「あの門には魔力を探知する陣が敷かれてるから魔術や魔法を発動してたら直ぐにばれる。」
「へー何で分かったの？」
「パッシブ能力〈罠探知〉の上位版〈陣探知〉だ。そういやお前はパッシブ能力はほとんど修得してなかったな。」
「九郎だってほとんど攻撃魔術覚えなかったじゃん。」
「中級以上の攻撃魔術は詠唱しないと威力がしょぼいから使いたくないんだよ。」
「えー、詠唱すればいいじゃん」
「嫌だよ恥ずかしい、取り敢えず門から離れた壁を越えて王都に入るぞ。」

「りょーかい。」

　壁の前まで行くと周りに人の目が無いのを確認してからオレを踏み台にしてランジーを抱えたミミズクを先に登らせてオレは刀を踏み台にして飛び乗る、刀はカバンから出した鈎縄を使って回収する。

「相変わらず忍者みたいな動きするなー」
「五月蝿い、降りるぞ」
「あ、待ってよ」

　壁から飛び降りると壁と家の間の路地裏みたいなところだった。

「ミミズク、お前ってゲームの時ここに家買ってたか？」
「買ってたけど何で？」
「ブラックスミスにはゲームの時のオレの家があったんだよ、お前の家に住めば新しく住む場所探さなくて済むじゃん。」
「あーなるほど、」
「それじゃあ道案内よろしく」
「りょーかい、あたしの家は南東の角だからから付いてきてー」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「おい、本当にここか？」
「うん、そうだよ。さ、入って入って。」

　到着したミミズクの家は、馬鹿みたいに広くて家というより屋敷だった。
　２ｍくらいの塀で囲まれていてかなり広い庭は軽く林になっていて外から家が見えない。

まずはほこっている家の中を掃除しながら見て回る、倉庫と個室６室と広い居間にキッチン、更に風呂とトイレまであったけど何でゲームの時に風呂とトイレを作ったのかが意味分からん。
取り敢えず一時間ほどかけて使わない部屋４つ以外の場所を一通り掃除した、一人で。
・・・ミミズクは庭でランジーとずっと遊んでた。

「九郎おなかへった、お昼にしようよ。」
「いや、お前ずっとあそんでたのに、まあいいか。飯にしよう。」
カバンからまた同じ果物を取り出しミミズクにも渡して食べる。
「もしかして九郎って毎日これ食べてるの？」
「たまにパンも食べるが１０日ほど前から基本的にこれだけだけど、何で？」
「ちゃんとお肉も食べないと体壊すって前から言ってるじゃん！」
「料理とか面倒だし生で食えれる果物と野菜で十分だろ。」
「とにかく、今日からはあたしがご飯作るからちゃんと食べてよね。」
「それは御の字だ、じゃあ料理は頼んだよ。」

「それじゃ材料買いに行かないとね。」
「ああ、今日はこの辺の探索しながらお前の服と食材を買おう。」
「ん？あたしの服も買うの？」
「当たり前だろ、お前いつまでそんな格好でいるつもりだよ。」
「あー、そういえばそうだね。でもお金あるの？」
「金貨３枚が今の全財産だ。」
「あ、言われてもあたしこの世界のお金の単位分からないや。」
「銅貨１００枚で銀貨１枚、銀貨１００枚で金貨１枚だ。」

「ようするに１万円？」
「まあ、その認識でいいや、能力付与や特殊加工されてない普通の服なら１着銅貨１０枚くらいで買えてるから好きなもの買えるよ。」
「やった！早く行こうよ！」
「それじゃあ行くか。」

第九話　王都到着（後書き）

次回町に出ます。

第十話　町に出て

王都の構造は中央に城がありその周りに東西南北の町があって町は1番地から8番地の八つにわかれていて、町の中心には門から城まで真っ直ぐに大通りがある、ミミズクの家があるのは南町8番地。

取り敢えず、南町の大通りに出てミミズクの服を買うために服屋を探す、家に行く時もそうだったがミミズクがやたら陽気だ、街並みは綺麗で色々な種族の人がいて見ていて楽しいのは分かる。しかし精神年齢は16歳のはずなのにどこからどう見ても8歳の子供にしか見えないのはどうかと思うぞ。

「九郎、あれって服屋かな？」
「看板に服屋って書いてあるし、そうだろ」
「じゃああそこで買お！」
「分かったからちょっとは落ち着け」
「早く早く！」
「・・・聞いてねえか」

入った店はそこそこ高級なとこで手近な服の値札を見てみたら銀貨1枚した。
入って直ぐに店の奥から顔に眠いと書いてある店員の男性が出てきて。

「いらっしゃいませ、自分は奥に居ますので決まりましたら声をかけてください」

直ぐ戻って行った、口調は丁寧だけど眠そうでやる気が全く見えない、何でこんなに疲れてんだこの店員。

「九郎、これどう？」

店員を見てたらいつの間にかミミズクは服の試着をしていた、シンプルな白いワンピースと青いズボンを着ていてスカートからズボンの裾が見えてる。

「うん、よく似合ってるよ」

「えへへ、ありがと。じゃあこれにするね」

そう言うとミミズクは着替えてから似ているワンピースとズボンを５つずつ選んだ。

「似たようなのだけで良いのか？」

「うん、白好きだし」

「それじゃ、それを買うか」

さっきの眠そうな店員に会計をしてもらい合計銀貨１５枚をつかい、残金貨２枚と銀貨８５枚。ミミズクを会計を済ませたさっきの服に着替えさせて着ていた服と他の服をカバンに入れて店を出た。

「さて、次は食料の調達だが、ミミズクに任せていいか？」

「ん、任された、でも九郎はどうするの？」

「オレは商業ギルドに行って武器の買取してくれるとこ探してくる、日が暮れるまでに帰るから買い物終わったら真っ直ぐ家に帰れよ」

「りょーかい」

ミミズクに銀貨８５枚を袋に入れて渡して落とさないように注意してから分かれる。

「あ、そういや」

商業ギルドの位置が分からん。

人に聞くのは面倒だし魔法で探すか、適当に路地裏に入ってカバンから銅鏡を取り出し探索魔法〈鳥瞰図〉、正式名称〈バーズアイビュー〉を使った。

〈バーズアイビュー〉は銅鏡に自分を中心に半径１０ｋｍ内を映し出す魔法で生き物は映さないけど建物の上に民家とか武器屋とか表示される、拡大すれば詳細な地形も分かるからゲームのマップ機能より便利だけど１０分経つと銅鏡が割れるから人気がイマイチな魔法だった。

どんな魔法かを正しく認識してれば発動できるので自分が分かれば魔法の名称は変えても問題無く発動できるのでよく使う魔法は言いやすい名称に変えてる。

「〈鳥瞰図〉発動」

商業ギルドの位置は北町の１番地にあった、今いるのが南町８番地で普通に歩いていっていって城を迂回してると結構時間がかかって面倒だし、飛んで行くか。

「〈メルモフェセス〉発動」

メルモフェセスって言いずらいし、後で別の名称考えよう。

鳥になって城の上を通ると兵士の訓練風景が見えた、城がやけにデカイのは兵士の宿舎と訓練場が含まれてるからみたいだ。

城を越えて適当な路地裏に降りて変身を解いて商業ギルドに向か

う。
商業ギルドのつくりは冒険者ギルドと似ていて入って直ぐの場所に二つの掲示板がある、片方は買取情報、もう片方は広告が貼ってあっる。

買取情報は鍛冶屋や薬屋とかの素材の買取情報で、広告は普通に店などの広告で、受付で誰でも銀貨1枚で2巡間貼れる。
今回用事があるのは買取情報の方なんだが、他に何人も掲示板を見ている人がいてよく見えないので人が減るまで広告の方を見ていることにした。

・クロック時計店、白月2巡の1日に新デザイン発売予定。東町7番地

・コーキンのお店、料理器具から食材、調味料まで何でもそろうよ！。西町3番地

・ジジェフト服屋、オーダーメイド受け付けます。南町8番地

・パワン魔具屋、写態機完成。南町8番地

「写態機？」

広告を左下から順番に読んでると聞いたことない物を見つけた。名前から推測するに写真機みたいな物か？、家の近くだし気が向いたらいってみよう。

その後直ぐに買取情報の方の掲示板が空いたのでそっちに移る。家の近くで武器の買取をしてくれる店を探すのに少し時間がかかったけど1店だけあった。店の名前はパワン質屋で何でも買い取って

くれるらしい、さっきの魔具屋の名前もパワンだった気がするけど別にどうでもいいし、とにかく行くか。

商業ギルドを出て路地裏に入ってから、また鳥になって飛んで帰る。

商業ギルドの地図によるとパワン質屋の場所はジジェフト服屋（さっきの服屋）の裏で、ちょうど人が誰も居なかったので店の前に降りてもとに戻ってから店に入る。

「いらっしゃいませ。おや？、君は服屋の方に女の子と来たお客様ではないですか」

パワン質屋に入ると何でかジジェフト服屋の店員が居た。

「あの、ここってパワン質屋であってますか？」

「はい、ここはパワン質屋兼魔具屋です。自分はパワン・ジジェフトといいましてこの家で大通りに対して表側で服屋を裏側で魔具屋と質屋を営んでいます」

「あ、オレは鉄九郎です、鉄が性で九郎が名前です。好きに呼んでください」

「ではクロガネ君と呼ばせてもらいます。ところで来店の目的はなんでしょう？」

「今度武器とかを買い取って欲しいんだけど、ここって具体的に何を買い取ってくれるんですか？」

「端的に言いますと何でも買取ります、買い取ったものは宝石や鉱石は魔具の材料に出来の良い武器などは他の店に転売しています」

「あとは商業ギルドの広告で見たんだけど、写態機って何ですか？」

「写態機は写真機を基本に精力や魔力の測定機と〈診断（イノーセス）〉を付与した水晶などを組み合わせた物で写真に写した人や魔物の状態（ステータス）と能力

を表示する魔具です」

「最後に凄く初歩的な質問なんだけど、魔具って何？」

「え、」

おお、さっきまでスラスラ説明してくれてたジジェフトさんが言葉に詰まった。きっと常識的なことなんだろうけどゲームの時はキャラクターメイクのアイテムの種類は基本的に全部魔導具／～～って表示さてる、たとえばオレの銃の種類が魔導具／遠距離武器だ（銃の選択肢が無かった）しそもそも魔具って概念が無かった。

「・・・あ、済みません。魔具とは何かですか。詳しく説明すると2時間ほど掛かりますけど時間は大丈夫ですか？、もう日が暮れますよ」

「え、、あの、明日でいいですか？」

「ええ、良いですよ。また明日来てください、明日は昼過ぎから服屋だけ開きますからそちらに来てください」

「ありがとう御座います」

お礼を言って店を出て周りに人がいないのを確認して

「〈メルモフェセス〉発動」

鳥になって飛んで帰る、店から家まで直線距離じゃそんなにないけど道が入り組んでて一人で歩いて帰るのは面倒だ。

家の前まで帰るとちょうど門の前にミミズクと知らないのが一人いたので空中で元に戻って着地する。

「ミミズクおかえり」
「へ？、上から人が！？」
「あ、九郎ただいまー」

おお、誰がか知らんが結構良いリアクションとるな。さっきから上とこっちを交互に見ながらオロオロしてる。

「取り敢えず、誰？」

第十話　町に出て（後書き）

次回は服屋の前で九郎と分かれた後の水来です。

誤字修正しました、黄金拍車さんありがとうございました。

全体的にサブタイトル変更しました。

第十一話（前書き）

水来が九郎と分かれたとこからです

第十一話

〈水来視点〉

もうちょっと九郎といたかったけど用事があるんじゃしょうが無いよね、それより今は九郎に美味しいご飯を食べてもらうために食材と鍋と調味料の調達をしよう、でもどこで買えるんだろ、町並みは九郎の言うとおりゲームとそっくりだからそのままあれば武器屋とか防具屋の場所は分かるんだけど八百屋とかあるのかな？、それと異世界といえばお米とか調味料が無いとか変な果物あるのが王道だから和食が食べれなくなるのは嫌だなー

「おっとと、うわ！」

「え？」

ドサッ

考え事してたら目の前で荷物をいっぱい抱えた男の人がこけて派手に果物をぶちまけちゃってる。

「えと、大丈夫？」

転がってる果物を集めてから一向に立ち上がらない男の人に話しかけてみる。

「・・・・・くて、・・・・っす」

「何？」

「カバンが重くて、立てないっす」

「あー、なるほど」
男の人の上に乗っかてる大きなカバンを後ろからひっぱって立つのを手伝ってあげた。

「ありがとう、助かったっす」
「どういたしまして」

立ち上がった男の人はあたしより頭二つくらい背が高くて細めで目が空色で髪は銀っぽい白、どことなく気弱そう。

「どうかしたっすか？」
「その、どうしてそんなにいっぱい持ってるのかなーって思って」
「ああ、これっすか、これは店に仕入れるものっす」

「お店やってるの？、なんのお店？」
「いやー、自分は雇われてるだっけすけど料理関係の店っす」
「食堂？」

「違うっすよ、料理器具とか食材とか調味料とか、とにかく料理関係の物を売ってるっす」
「ホントに！、良かったらつれていって！」
「今向かってるとこっすからいいっすけど少し遠いっすよ？」
「ありがと、大丈夫だよ！」

犬も歩けば棒に当たるってやつだね。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――――

「ついたっす」
「おー、大きいねー」

ついたお店は普通の民家の二倍くらいの大きさで大きな看板にコーキンのお店って書いてあるけど何のお店かこれじゃ分からないよ。
店員さんについてお店に入ると金髪の人が机にもたれかかって寝てた。

「店長、戻ったすよ。店番が寝ててどうすんすか、起きてください」
「あ、ソー、お帰り、そっちの可愛い子はどうしたんだい？」
「寝てたことはスルーっすか、お客さんを連れてきたんすよ、倉庫にしまってくるっすからちゃんと働いてくださいっす」
「了解したよ、可愛い子の相手は私に任せたまえ」
「はぁ・・・」

店員さんが荷物を持ったまま二階に上がっていって居なくなると店長さんはおもむろに立ち上がって伸びをしてる、店長さんは金髪碧眼の細身の美人さんなんだけどなぜか着てるのが黄緑色のつなぎで何だか少しもったいない感じがする、あと伸びをしてると大きな胸が震えてて羨ましい、九郎もやっぱり大きな胸がいいのかな？、元々そんなに大きくなかったけど今は・・・、成長するよね？

「こんにちはお嬢ちゃん、あいつは店員のソーで私はコーキン、一応この店の店長だよ、お嬢ちゃんのお名前は？」
「あたしは水来だよ、コーキンさんはどうしてつなぎを着てるの？」
「ああ、これかい？、この服は丈夫で動きやすいから気にっているんだよ、スカートは動きずらいからあまり好きではないね」
「あたしもスカートだけだと動きにくいから下にハーフパンツはいてるんだ」
「ふふふ、それは気が合いそうだね。さて、それではお探しのもの

は何かな？」

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――――――

〈買い物終了〉

「ふふふ、お買い上げありがとう、ミズクちゃん」
「随分と買ったすね」
「うん、預かってたお金全部使っちゃった」

ソーさんの言った通り何でもあってお箸にお米、お味噌まであってびっくりしたけど、これからも和食が食べれるのは凄い嬉しい、ひとまず普通の家にある調味料と食器と調理器具、食材はお米と豚汁の材料を買ったんだけど、ちょっとちょーしにのって買いすぎちゃって量があたしくらいあって持って帰るのが大変になっちゃった。

「よし、ソー、ミズクちゃんの家まで配達してきてくれ」
「え、疲れて、」
「良いんですか！」
「・・・了解したっす・・・」

ソーさんが重い調理器具と食器を持ってくれたのであたしは食料と調味料だけでけっこう楽になった。

「それじゃミズクさん、道案内よろしくっす」
「うん、りょーかい、ソーさんありがと」
「どういたしましてっす」

〈水来視点終了〉

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

〈ソー視点〉

「ずいぶんと入り組んだとこに住んでんすね」
「うん、でももうすぐつくよ」

ミズクさんの後ろに付いてずっと歩いていて今はかなり入り組んだ道を歩いてんすけど、この街で１６年生きてるっすけどこんな道があるのは知らなかったす。それにしてもミズクさんってどう見ても自分の半分くらいの歳っすけど、そもそもこんな子供に銀貨８５枚も持たせてお使い頼むってどんな親っすか、怖い人じゃないといいっすけど、怖そうな人なら直ぐに帰るっすけど。

「とーちゃく、ここだよ」

考え事してたら着いたみたいっすねって

「デカいっすねー」

門の外からじゃ庭の林で家が見えなくて余裕で店よりデカいっす。
こんなところにこんな家が

「ミミズクおかえり」

って

「へ?、上から人が!?」

降ってきたっす、真っ黒い人が降ってきたっすどうゆうことっすか！？

「あ、九郎ただいまー」

どうやらミズクさんの知り合いみたいっす、よく見たら目と髪の色が二人とも黒と灰色っすね、兄妹っすかね。いや、それよりどうして上から？木から飛び降りたっすか？

「取り敢えず、誰？」

上と降ってきた少年を交互に見てると話しかけられたっす。

「あ、自分はソーっす」
「ソース？」
「違うっす、ソーっていうっす、店長の命令でミズクさんの荷物運びしてたっす」
「ああ、ソーさんか、お疲れ様です。オレは九郎っていいます」
「よろしくっす、クロウさん」
「九郎でいいですよ」

「そうっすか、じゃあクロウも普段の喋り方でたのむっす」
「あれ、オレの喋り方変だった？」
「いえ、何となく分かっただけっすから気にしなくていいっすよ、それじゃ、自分はそろそろ帰るっす、店長の飯つくらないといけないっすか」
「じゃあ、縁があったらまた会おうな」
「またねー」
「はい、さよならっす」

〈ソー視点終了〉

第十一話（後書き）

予約掲載してみました。

第十二話（前書き）

１０，０００ユニーク突破しました。ありがとう御座います。

第十二話

「ソーさん何か面白い人だな、語尾が～～っすの人って実際に居るんだな」
「あははは、そういえばそうだねー。でも最近ではラノベでも見ないよ？」
「そういやそうだったな。さて取り敢えず家に入ろう、ほら荷物よこせ」
いくら人目が無くても門の前にいつまでも立ってるのは不審だ。
「りょーかい、ありがと！」
取り敢えず荷物を台所に運ぶ。
そういえばミミズクは何でゲームの時こんなに広い家買ってたんだろ。
「なあミミズク、何でこんなにデカい家買ったんだ？」
「買ったんじゃなくて、第一回ＣＶＣＴの賞品だよ」
「ああ、そういやお前クランの族長だったな、忘れてた」
クランは簡単に言うと冒険者のグループで二人から作れる、一緒にダンジョンに入ったり道具作成したり大会出たり駄弁ったりする集まりで、オレは兵器同好会ってクランに入団しててオレの銃の弾は全部族長の黒煙さんに作ってもらった。ＣＶＣＴはクランバーサスクラントーナメント《Ｃｌａｎ Ｖｅｒｓｕｓ Ｃｌａｎ Ｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ》の略で月一で開かれてた。
「それじゃ、料理楽しみに待ってるよ」

「ん、りょーかい、できたら呼ぶね」
「ああ、部屋にいるから頼むよ」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

ミミズクの家は二階に部屋４つと倉庫があって一階は玄関から見て右側に居間と水周り、左側に部屋２つがあって掃除の前に玄関側がオレの部屋で奥側がミミズクの部屋に決まった。

取り敢えず許可は取ってあるからこの部屋の模様替（かいぞう）えを始めるよう、先ずは扉と窓の上に防音の陣を刻んだ鉄板を打ち付けて次に部屋の中に元々あるベットとタンスと机と椅子を部屋の端に寄せて空いたスペースに鉄板を敷き詰めて床と壁の補強をして鍛冶道具一式を出して終了、重い物移動には〈浮遊（フローデト）〉を使って鉄板とか道具は全部カバンから出した。

「九郎ー、ご飯できたよー」
「分かった今行く」

丁度料理が完成したみたいだ、ミミズクの料理を食べるのは本当に久しぶりだ。

―――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――
――

「御馳走様、美味かったよ」
「うん、おそまつさまでした」

食べ終わった食器はオレが洗うんだが当然洗剤は無い、そういえば回復系の魔術で汚れが落とせるってのをラノベで読んだことがあったので〈浄化（ピュアフェケイション）〉を使ってみたらキレイに落ちた、これから刀についた血や脂もこれで落とそう。

「やっぱり異世界には電気無いんだねー」

「まあ代わりになるランプがあるから困りはしないが燈油が少し高いからこの世界では基本日が暮れた皆寝るんだがな」

外は完全に日が暮れたので暗いが居間はミミズクが使った〈灯光（メイプライト）〉で明るい、オレはスキル〈暗視〉があるので普通の明かり系の魔術は覚えてないしそもそも夜目がきくので月明かりで十分だ。

「あ、そういえばお前の服カバンに入れっぱなしだから持ってくるよ」

不意に思い出したので部屋からカバンを持ってきて服を渡す。

「ほらこれ」

「うん、ありがと」

「ん、何か落ちたぞ」

「あれ、何も持ってなかったはずなんだけど」

ミミズクの着てたコートから落ちた物を拾うとギルドカードだった。

「なにそれ？」

「お前のギルドカードだな、登録名オウル、年齢８歳、ランクＤ、ジョブ重剣士って書いてあるな」

「ランク？」

「ああ、ランクってのはあれだ、この世界での冒険者の強さの目安

でDが一番下でSが一番上だ、ランクは12歳以下は上げれないことになってる」
「へー、あたしは後四年間はランクDのままかー、九郎って今何歳？」
「オレは12歳だけどまだランクを上げる気は無いな」

「そういえばこの世界でもクラン組めるの？」
「たしか冒険者ギルドで申請すれば組めるけど、二人で組むか？」
「うん、じゃあ明日組み行こ！」
「分かったじゃあ明日の朝にでもギルドに行くか、クラン名考えとけよ」
「任せて、いいの考えとくね」
「ああ、任せた。さてと、そろそろオレは寝るよ」
「おやすみー、九郎また明日ね」
「ああ、おやすみ」

第十二話（後書き）

もう少し更新速度を上げたいです・・・

第十三話

〈翌朝〉

取り敢えず、ミミズクを起こす前に冒険者ギルド位置を調べておこう。
昨日の割れた銅鏡に〈修復〉を使う、鍛冶スキル〈修復〉は一度に一つの金属部品しか直せないから時計みたいに部品の多い物を直すのにはまず部品を全部直してから自分で組み直すので時間が掛かるが銅鏡みたいに一つの部品だけの物は一瞬で直せる。
直った銅鏡を使ってまた〈鳥瞰図〉を発動。冒険者ギルドの位置は南町の2番地で城を挟んで商業ギルドの反対側にあった。

さて、そろそろミミズクを起こしに行くか。
取割れた銅鏡を直してからカバンにしまい隣に部屋に向かう。

「起きろミミズク、朝だ」
「・・・すぅ」

反応なし、相変わらずの眠りっぷりだ。

「おい、起きろ」
「・・・・・・すぅ」

しょうがない。

「よっ」

パンッ

「わあ！、あ、九郎おはよー」
「ああ、おはようミミズク」
「ねえ九郎今の大きな音なに？」
「かんしゃく玉を鞘で打った音だ」

ブラックスミスの道具屋で買った物で魔物の注意を引くアイテムなんだが結構簡単に爆発して持ち運びにむいてないので人を起こす位しか使い道がない。

「目が覚めたなら顔洗って飯食ってギルド行くぞ」
「りょーかい、居間でまってて」
「分かった」

取り敢えず居間に移動。

初めてかんしゃく玉を見つけたときは火薬があるんだから探せば銃も見つかるんじゃないかと武器屋を見て回ったりしたが結局ブラックスミスには無かった、この街でも一応探してみようと思ってるんだがきっと見つからないだろうけど見つかれば人目を気にせず銃が使えるようになるんだよな。

「お待たせー、九郎は何か食べた？」
「ああ、お前を起こす前に果物を食った、ミミズクも食うか？」
「うん、ありがとー」

いつもの果物をミミズクと一緒に付いてきたランジーに渡して食べ終わるのを待った。

ランジーは虎のはずなのに果物をよく食べる、昨日の晩ミミズクが生肉をあげてたけど果物の方が好物みたいだった。

「ごちそうさまー。それじゃクラン組みに行こ！」

取り敢えずギルドへ出発、

ーーー

「ｆｏｒｅｉｇｎ　ｂｉｒｄ、正にオレ達って感じだな」

最後にクラン名を記入して受付に渡す。

「では次にクラン章の形をこの中から選んで下さい」

「クラン章って何？」

「はい、クラン章です。クラン章はギルド公認のクランである証と同時に、同じ形のクラン章を持っている人どうしでの念話を可能にする魔具でもあります。クラン章の色はマスターの色、サブマスターの色、ノーマルメンバーの色の三種類を選んでいただきます」

受付の見せてくれたクラン章の形は羽根、三日月、睡蓮の花の３つ、当然羽を選択

「ミミズクは何色が良い？」

「九郎に任せるよー」

「分かった。」

「それじゃあ、形は羽根、色はマスターが白、サブが黒、ノーマルが灰でお願いします」

「分かりました、それでは少々お待ちください」

ーーー

金貨１枚を渡してクラン章と細い鎖と釣りの銀貨７０枚を受け取る。クラン章は指輪になっていてそれぞれ一緒に受け取った細い鎖でペンダントにして首から下げる。

「さて、オレはこの後武器屋を見て回るつもりなんだがミミズクはどうする？」

「んー、あたしはクエスト受けてみようかなー」

「分かった、受けれるクエストは自分の一つ上だからな、あと武器はこれ持っていけ軽いが無いよりはマシだろ」

カバンからブッシュナイフと鞘を固定するためのベルトを出して渡す。

「ありがと、壊さないように使うね」

「いや、暇潰しに作ったただの凡作だから別に壊しても大丈夫だ、好きに使ってくれていいよ。それじゃ日が暮れるまでに帰れよ」

「うん、また後でねー」

第十三話（後書き）

前回の更新からまた時間が空いてしまった・・・

第十四話

ミミズクがギルドに戻っていくのを見送ってからオレも移動を始める。

武器屋の位置は今朝ギルドを調べる時に一緒に調べていて南町３番地と東町５番地に１店ずつあったので先ずは遠い東町の方に向かう。

ブレイブルグには武器屋は２店しかないので簡単に回れるがブラックスミスにはその１５倍武器屋がある上に街の半分は何かしらの鍛冶関係店で中には矢・ボルト専門店なんていう矢とボルトはかなりの種類が置いてあるのに弓とクロスボウは一つも置いてない変わった店もあった。というか武器屋はほとんど専門店だった。専門店ばかりの理由を推測するに商品を他の店とかぶらないようにしているうちに気が付いたらほとんど専門店になったんだと思うが実際にはどうだかは知らないし調べる気も全く無い、めんどいし。

と、取り留めの無い事を考えていたら武器屋に到着、差別化のために心の中ではこっちの店を東店、南町の方を南店と呼ぶことにしよう。いや、別にどうでもいいな。それより店に入ろう。品揃えを見てみると遠距離武器がメインで他にはナイフと小盾が少し置いてあった、取り敢えず店員に話しかけよう。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが今時間いいか」

「・・・なにか？」

「弓やクロスボウ以外の変わった遠距離武器を探してるんだ」

「・・・試作品とかなら何個か有る」

「ああ、見せてもらえるか」

「・・・待ってろ」

店員が何でか不機嫌だが見せてくれるなら問題ないか。

店員は店の棚に並んでる物から二つを持ってきて試作品を持ってくると言って店の奥に入っていった。

持ってきた二つの武器はどちらも登的武器のボーラとカーリで、ボーラってのは三つ又のロープの先端に球状の錘をつけた武器で投擲されたボーラは錘の重量と遠心力で広がった状態で回転しながら飛び、標的の脚や翼に絡み付き歩行や飛行を妨害できる他に遠心力を利用した打撃武器としても使える。カーリは簡単に言うと重たいブーメランなんだがブーメランと言っても手元には戻ってこないようになってる。

・・・カーリはともかくボーラはどうしようか

あ、店員が戻って来た。

「・・・これが試作品の魔砲器」

店員が店の奥から持ってきたのはピースメーカーに似たリボルバーだった。

「魔法器？」

「違う、魔術蓄積発砲器、略称魔砲器。

シリンダー部分に円柱型の魔宝石または魔術付与した水晶のカートリッジを最大６本まで差し込んで砲身にセットして引き金を引くとシリンダーが回ってから撃鉄がカートリッジの底を撃ちその衝撃で魔宝石ならその属性の魔力の塊、水晶なら付与された魔法が前方の穴から発砲される様になってる」

店員は魔砲器を手にもって説明してくれた。

要するに弾が実弾かどうかの違いだけで本物の銃とほとんど同じ構造ってことだ、元になるものがあったかどうかは知らないがたとえあったとしてもそれをここまで形にするのは本当に

「・・・・・・すげぇ」
「うぇ！？」

店員が奇妙な声を上げて顔を少し赤くした。

「どうした？」
「・・・・何でもない」
「そうか、ところでそれの問題点は何なんだ？、試作品ってことは完成してるわけではないだろ」
「問題点は・・・見た方が早い」

そう言うと持ったままだった魔砲器にカートリッジを1本差し込むとオレの頭に向けて引き金を引いた

「いたッ」
「・・・威力が弱い、これなら石でも投げた方がまし」
「オレを撃つ意味が分からんが欠点は分かった、そこでちょっと相談があるんだがいいか？」
「・・・聞くだけ聞いとく」
「コレの改良オレにも手伝わせて欲しい」
「・・・何で？」
「いや、別に対した理由じゃないけど強いて言えば使ってみたいからだ。こう見えても鍛冶師だから役に立てると思うぞ」
「・・・じゃあ、明日から来て」
「分かった、それじゃあまた明日」
「・・・またね」

取り敢えず南店にもいくとして、微妙に違うがやっと目的のものが見つけれた。魔砲器を完成されて広まれば取り敢ず銃を見られても魔法器だとごまかせる様になる。とは言ってもどうやって完成させるかが問題だ、オレが〈強化（リンフォース）〉あたりを付与すれば威力は簡単に上がるけどそれじゃあ魔術師がいないと作れないから量産が難しいから広まりずらい・・・そもそも威力が弱くなる理由が分からん今色々考えても詮の無い事か。

取り敢えず行ってみた南店はどこぞのＭＳみたいに特徴がないのが特徴な店でそこそこ高性能の普通の剣や弓や盾しか置いてなかった。

さて、適当にそこらへんの店で昼飯食ってジジェフト服屋にいくとするか。

第十四話（後書き）

あらすじに不定期更新と追加しました・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4976x/

物理重視な魔法使い

2011年12月21日01時41分発行